

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



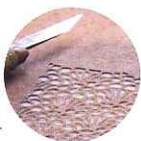
Keiko Nasu

1982年岐阜県生まれ。高校はデザイン科に進み、卒業後は印刷会社に就職し、雑誌の表紙デザインなどを手掛ける。27歳の時に伊勢型紙と出会い、退職して職人の道を歩み始める。



伊勢型紙(いせかたがみ)

小紋や友禅などの型染めに用いる伝統的工芸品。三重県鈴鹿市の白子と寺家という極めて限られた地域に伝わる。江戸時代に紀州徳川家の保護を受け発展し、現在も型染め職人の間では「型紙」といっては伊勢型紙」といわれている。



伊勢型紙職人

那須 恵子 氏

伝統を未来につなぐために
ひたすらに研ぎ、彫る。

極限ともいえる緻密さゆえ、一見無地のように見える着物に施された紋様「小紋」。それは型紙を用いた染めによって生み出される。中でも最も多く使われているのが伊勢型紙。その始まりは定かではないが、室町時代には伊勢型紙による着物の染めがあったとされ、高度な型紙づくりの技法は將軍家によって守られた。

那須恵子さんは伊勢型紙の本場、三重県鈴鹿市で修業に励む若き職人。生涯にわたる仕事をしたが、そんな強い思いから会社を辞めてまでこの世界に飛び込んだ。

きっかけは？

ひと口に伊勢型紙づくりといってもさまざまな技法があり、那須さんが磨いているのは突彫りの技。小刀一本だけを扱うもので、紙に突き刺した刃先を自在に操ることで絵画的な模様を実現できる。型紙に用いるのは、繊維が太くて長い美濃和紙を基に、専門の職人が手間と時間をかけてつくる紙。丈夫な上、染めの際、水に濡れても収縮しないのが特長だ。

小刀は、図案に合わせて自らつくる。鋼の先端をしながら薄く、切れ味鋭く研ぐ。小刀は伊勢型紙職人の命であり、「研ぎに三年」といわれるほど良い刃先を得るのは難しい。

小刀ができ上がると、彫りに挑む。図案に忠実に写した無数の点、二ミリほどの下絵を一つ一つ彫り、緻密な小紋に仕上げていく。その間は姿勢を変えられることはできない。体がわずかでも動くと言えないためだ。左手の人差し指の爪で刃先を支え、微妙に向き

を変えていく。刃がこぼれるたび、刃先を研ぎ直す。息詰まるような作業、気の遠くなるような手仕事を来る日も来る日も続けることで、那須さんは着実に腕を上げている。

今後の抱負は？

那須「あのの人に彫ってほしい。あの人がいたら、安心して任せられる。一日も早く、そう思ってもらえるような職人になりたいですね」

自らの手で伊勢型紙の伝統をつなぐと、若き職人の瞳は常に未来を見据える。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2014年1月取材掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!!
精魂込めて型紙をつくる姿を動画で紹介しています。ぜひご覧ください。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する
映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE
WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版
パソコンやタブレットでもご覧いただけます。
本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉

TV番組
ディスカバリーチャンネル (CS)
冠番組
「アットホーム presents 明日への扉」放映中
毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン
ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!!
最新号のご案内

No.079 / 箒職人 中川 祐一 氏